

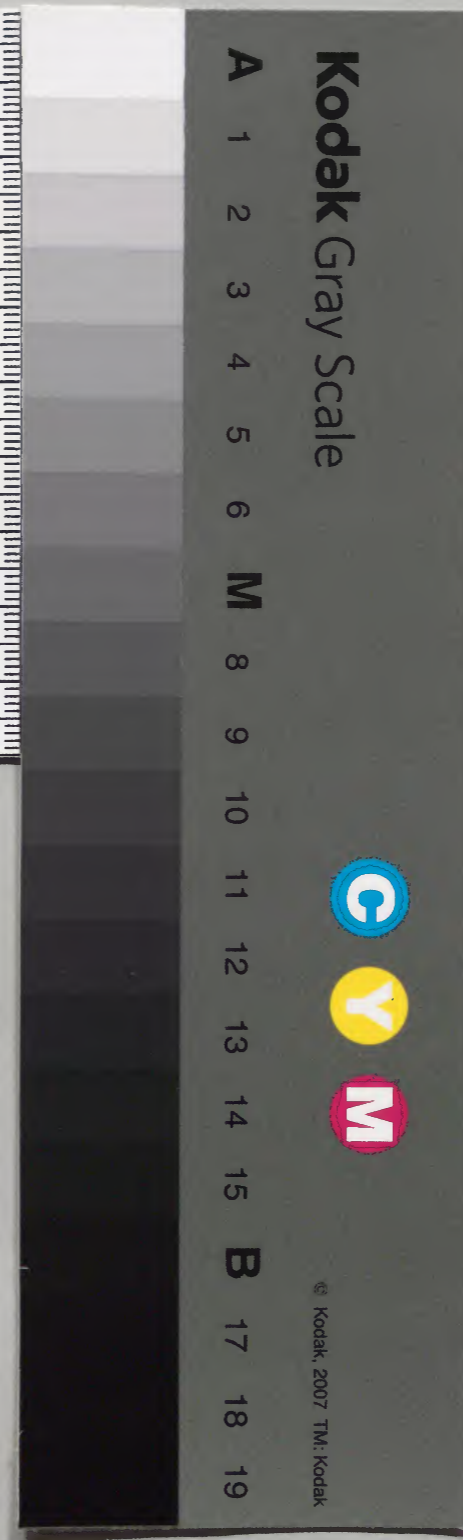
正實朝鮮征討始末記

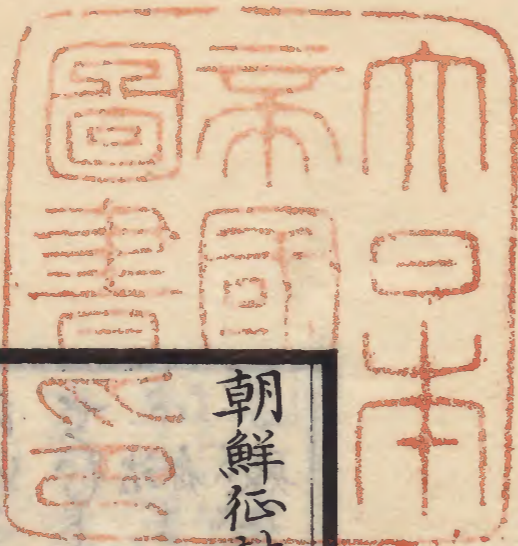
四

和書門類		二五一四五號
一	九	六函
三	架	五冊

內閣文庫		和書類
二	五	四
一	五	五號
一	六	八函
七	架	五冊

內閣文庫	
番號	和 25145
冊數	5 (5)
函號	168 86





朝鮮征討始末記卷之四

對州

山崎尚長輯

村一善校

小西行長等乘取平壤城之事

日本六月十四日夜明朝鮮の軍勢潛り大同江と船より渡り遂に江岸の日本の陣に仕寄せ喚び叫びて攻込り小西が勢前後も知らず休居たれば驚き騒ぐ處と朝鮮勢もさしひりて第一の陣と突く由断る事なれば思ひ掛なく一陣突立ち第一の黒田陣より黒き馬に乗る武者衆を抽んで退散し馳来り河邊より朝鮮人



と引繼し討留たる左も剛強の働烈き闘戦なり此武者ハ
甲州長政たりと後ノ聞て各賞譽せし諸陣の兵尋て到
る小西の勢左右ノ開きて鉄砲を以て打らる朝鮮勢四
度路ノ見ゆる處と平くは鎗ひつ提け突て入息と継ぎせ
ハ攻戦ふ宗義智ハ敵の後ろよ廻つて中ノ取つて無二
無三小攻立てくれハ朝鮮勢立つ足も弱く敗走しつる
江邊ノ馳せ行く船ノ残る居たる者共是と見れも助け乗
せむともせハ船と漕ぎ返り狼狽城ノ逃歸ハ逃來る者
ハ船ノ乗る事も叶ふ後ろよりハ和共透き間やく追掛
る敗卒ども足も地ノ附ハ宙と飛む江中ノ走つて心も溺

死一又ハ討取られけり中も足もや逃ぐのびる残
卒共淺瀬より我勢と押し渡して城中一逃入けり日
本勢是と見て淺瀬ハ彼所と各怡ひ夕陽ノ及びり
も諸軍一處ノ打寄せ馬と乗入ニ流と切つて押渡る
向の岬と守居たる城兵ども一さくも支つて城一逃入
けり寄幸ハ安ニと江と渡りて残らば向ふ著き其夜ハ
江邊ノ陣を取て翌十五日早天ノ城外ノ押寄せて関の聲
を攀ぐれども城中静まりて之は音もせん扱ハ夜もま
きれ皆ノ落失たるとの又ハ謀も有らんと暫く猶豫し
々る猶も心もたたく思ひくれハ諸將軍士と傍らある

牡丹峯に登せ城中を窺せくも小もや落共しつと見え敵
一人も無く寐寔たれば和と碎のびて平壤城と乗取ぬ
此所より兵糧と數萬石をん置きたるは日本人の和を
入小くもいづり城壘と攻め築き各持口と守り敵を禦ぐ
備となりし

朝鮮初め日本の軍兵分つて江沙の上小駈より陣所十餘
屯と作て草と結びて幕より居たりし既も曩日と經れ
ども江と渡る事を得ば警備頗る怠りぬ金命元等城上
より望み見て以為夜に乘ぞり掩蔽之として精兵と以
て擇り高彦伯等として水れを領せしり浮碧樓の下に

る綾羅渡より潜小船より渡りけし初めは其夜の三更は
事とくつとむと約したるの免角まで時刻あられ既に
江と渡る比ハ昧夾よりなりぬ然もも諸軍の幕中を見る
は敵猶未起きたるをれを進むる茅一の陣に突て入る敵も
猝の事にて驚き擾る朝鮮勢より多くは倭兵と射殺し
中にも土兵伴旭景先登り力戦して遂に倭兵の為に殺さ
る此駈ぎより倭軍の馬三百餘匹と奪ひぬる處も程な
く諸陣の日本勢悉く起り立大よりのあきとれは朝鮮勢も
退き走り還りて船を乗らんとしてくれども船中の人を
敵の已に後より迫る伐見て中流より敢て船を寄せし

ハ溺死する者甚衆一其餘の軍勢王城灘より流石と横小
 まるく渡りて久しハ日本勢始りて水浅の渚へき處を知
 了日暮衆軍登りて王城灘より渡りて朝鮮の灘と守
 る者敢て矢一川も放りて皆散りて逃走り日本勢ハ江と
 渡りても猶城中の備ありし事と疑ひ遅回て前よりけ
 了是夜尹斗壽金命元は城門を開き盡く城中の人と出
 軍器火砲と風月樓の池水の中へ沈め斗壽等普通門より
 出て順安とさして落りて日本勢ハこれを知る者なく
 一人も追掛る者なし從事官金信元獨り大同門と出て舩
 に乗了流りて従ひ江西とさして落りて明日敵軍城外に至

了牧丹峰に登り良久く觀望し城空く人無きと知り乃ち
 城を攻入りて最前王國王平壤に至り評議し皆糧
 餉の事久く事と憂へ盡く近邊村々の年貢と取り平壤に
 運送せしむ城陥る不及じて本倉の穀十餘萬石皆敵の物
 とかきぬ此時柳成龍が註進博川に達し又巡察使李元翼
 從事官李好茂も平壤より來り倭軍に渡りたれやハ
 と云ふゆゑ其夜國王及び内殿も發駕ありて嘉山一向を
 る世子ハ廟社神主と奉じて別な他路より發足ありけり
 抑國王平壤と出らば人心崩れ潰れ過る所舌民共
 輒ら倉庫を押し入り穀物と搶掠め順安肅州安州寧遠博川

此處の皆くくの如く散くくをたりくくする斯て國王
 ハ義州に至らるは明朝の參將戴某遊擊將軍史儒各々
 一軍の兵を領し平壤に向ひ林畔駐し至るの平壤には
 隙と聞て引還し義州に駐し明朝の軍を搦ひ銀
 二萬兩と贈る唐詔を領し義州を去る是より先き
 遼東より人と明國一遣く日本人朝鮮を攻るの變有る
 を註進いごども評議をまじり異同あり或ハ朝鮮日本
 の為小向導とくとの疑ひもつるれども兵部尚書石星
 意を銳し朝鮮一救援の兵と出さば了と云ふ時は朝
 鮮の使刺點たる者玉河館に有るを石星とれと庭に呼

出遼東より變を報ぐるの文書と出しこれと示し申
 點声と放て号慟し使者の一行の人と朝夕大に泣き悲し
 接兵と出されむ事と請ひければ石星これと哀し己は
 奏て二軍の兵と一國と衛り我為軍用銀とも請
 ふよ及ぶ申點己は回して通州に至る時小急難と告る
 使し鄭嶮壽進で至る石星引て火房と土よて塗て下
 の室かを朝鮮の俗くつろと云ふ入るるづの使事状を問
 ひ或ハ流涕に至ると云ふ此らるるに至るハ連日朝鮮は
 使と遼東追差向け急と告げ援いと請且中國は内附内
 ハ外國より其國と中國の版せむ事と乞ふ蓋し日本勢已
 籍に入て附從むと云事たり

小平壤を陥れ其勢ひ高きより、鏡の水と建ちての如く、皆人謂らく朝夕は當に鴨緑江にも至らざると思ひ事此危急此の如くなれば内附せむと欲せらるるに、幸に敵軍既小平壤に入、城中は是ととも數日逗留せしゆゑ、順安永柔ハ平壤と咫尺なれども来り犯さば此を以て人心やしく、定て餘燼を拾ひ收めて、明兵を導き迎へ、終小平復の功と致し、此實に天也、人力の至る處は非ざらん。

小西行長與明將剛安定館之事

日本 去程は小西攝津守行長宗對馬守義智松浦式部卿法

印鎮信有馬修理大夫義統大村新八郎五島大味守以下平壤城に楯籠りて威を平安道に振ひ常邊境を侵し奪ひ鴨緑江と流らむと勢ひて居たり、城迫の撃きの城ハ大友左衛門督義統黒田甲斐守長政久苗米侍後秀包小早川左衛門佐隆景次第に城壘を搆一たし是急難の時小首尾相救むむ為なり、然る小七月十八日、明の萬年日本文平壤の安定館に明の撥兵著陣し、翌十九日平壤に押寄せ、此程日々淫雨して日本勢由断りて居たり、處一明兵急し七星門より攻入る者六七十人、城内甚し道筋狭く人馬押合たる中一和軍は鉄炮を多く打掛

くれを攻入たる者共と矢庭を悉く打倒し行長諸將と等
 く城と出て固戦しつゝ小將一負忽ち鉄炮の中つて死し
 けしは是を見て明軍一度は吐と大崩れをかつ逃去り切
 所は行掛りてハ崖より落ち或ハ深田泥の中は追え
 められ死傷夥し又一負の明將殘卒僅く漸く命を免れ
 逃げ延びたり日本勢明軍と初めの幸合はて免頭極面
 かのの兎と著金龍白象等の馬面と掛け軍粧甚小異形
 甲冑旗旌ありてと曜りくれハ明東の群馬見たりざる
 ゆゑ少や左右を去り居込りたりと見て和軍具と立
 関と似る諸勢一度はきり掛りたるゆゑ明兵も無く

敗北ハ諸將明軍を幸と見せ長追せば軽く軍勢を引
 入せけり

朝鮮同七月遼東の副総兵祖承訓兵五千を率ひ来て援ふ
 と先づ觸化至りぬ宣沙浦の僉使張佑成ハ大定江の浮橋
 と造り老江の僉使閔継仲と晴川江の浮橋と造り明兵と
 渡さむと支度ハ柳成龍も前むが安州にゆくこれ比倭軍
 け平壤に足と欠久く出で居たりハ巡察使李元翼ハ兵
 使李養と共順安に駐り都元帥金命元ハ肅州に居り
 斯て祖承訓義州に至り遊撃史儒其軍を以て先鋒と以て
 承訓と乃遼東の勇將とて度々北虜と戦ひて軍功あり

ハを謂らく此いびの日本勢も必討取るべしと嘉山よ
至りし時朝鮮の入り向ひくるは平壤の日本勢もや走
るなるむの其者對て未退ふべしと云ふ祖承訓酒と擧げ天
と仰ぎ祝しやぶく敵猶彼に在る必天帝我よりて大功
を成さしむる也と喜びけし是日順安より夜の三更に軍
と發し進むを平壤と攻たつた折より大雨ふり城上小
敵の守兵もなつたやいは明兵七星門より攻入りの城内
此路狭く委巷多く馬足も展びづかたし日本勢ハ險
阨に依て鳥銃と乱發さるハ遊撃史儒丸の中より即ち
斃せらる其外人馬多く死に祖承訓も遂に軍と退ける

敵も急し追ぎくるも後軍の暇兵ハ泥濘の中ち陥りて自
由りし事能くざる者共悉く敵れ為し害せらる祖承訓は
残りし兵と引きつし順安兩州と打通り夜中は安州の城
外に至り馬と立て譯官通朴義倫を呼て云ひくるを我ハ
軍兵今日多くれ敵と殺しむるも不幸ありて遊撃史儒
手を負て死たり其上天の時利ありて大雨泥濘より敵と
殲し事能くは猶軍兵を増て又進發さる一汝の宰相朝鮮
宰小告て動く事なるは浮橋より撤く可らむと云ひ畢
て馳て兩江大定江浮橋と渡り軍を控江亭に駐め密蓋し
祖承訓戦い敗れ膽をむや敵の追討せし事を恐りて前

二江と阻て防ごしと思ひ、故に斯くハ急ぎ、也柳成
龍ハ從事辛慶音、て往て慰せ、且糧饌を送り、祖
承訓ハ控江亭に留る事二日、わろ、連日夜大雨、諸
軍野陣、衣類兵具盡く濡れ、皆祖承訓と怨、く、ゆ、
退て遼東へ還る、子柳成龍ハ人心動揺せし事、恐、
安州に留る、後軍の至るを待、る、

加藤左馬助乗取番船之事

日本 和軍ハ兼て水陸に勢と分て、敵と攻むと評議、全
羅、の、遠て西海道に出、と志、る、船、手、の、人、ハ、九
鬼大隅守嘉隆、藤堂、依渡、守高、常勝、坂中、務、少、輔、安治、加藤、左

馬助嘉明と始、て此度武勇と顕、と譽、れ、と異國に殘
さむ、面、心、掛け居ら、る、藤堂高常、心、早、き、勇、将、な、れ
む、手、勢、五、百、人、を、帥、み、密、に、船、を、乗、り、出、し、唐、島、
と、浮、く、る、番、船、と、目、が、つ、り、漕、つ、り、れ、番、船、共、篠、と、け、
如、く、矢、継、ぎ、や、散、り、射、る、藤、堂、家、の、勇、士、共、射、れ、と、も、打
ども、事、と、も、セ、バ、一、番、は、藤、堂、新、七、郎、敵、船、に、飛、乗、り、續、て、藤
堂、作、兵、衛、と、始、め、我、も、く、乗、り、移、り、て、手、く、難、く、
忽、ち、敵、船、數、十、艘、乗、取、た、り、味、方、の、兵、船、共、あ、れ、と、見、て、我、方
船、と、乗、出、し、逃、る、船、に、追、ら、れ、て、百、餘、艘、乗、取、皆、唐
島、一、打、上、せ、バ、巴、夜、半、に、及、び、く、此、勢、は、唐、島、を、放、火

おくめ首百餘級討取て其夜々唐島に陣と取て翌日諸將
 打寄て各軍評議有ける中は加藤嘉明ハ用事と調ふる体
 こそ何れも好く座と立て若黨と招き向ふ見ゆふ敵の番
 船と乗て取るべし手船用意とてと云ひ遣て是れありぬ
 休て坐し歸て居たるる事かみ存居たる勇士共此
 密意を聞と等く小船三艘に取乗て飛が如く漕出ハ
 目附兵諸將と見るとあるとあれよく加藤の手は者抜
 け懸てとて制し留めよや怒て罵てくる嘉明ハ知らぬ体
 よてこのは灰馬助が小姓共と見ると僻目某も知せ
 ば卒尔乗出せし是ハ自身すのて押留めむしハ留る

ありとて彼者共と呼返してと云捨て兵船一艘
 は打乗押出ハ嘉明ハ思ふまゝ諸將と出しぬ揉る
 揉むて急ぎしは漸く之艘船は追附きく加藤が一和
 の勢最初の密意は差圖よく用意せし事なれば言ふと
 追らるる漕出ハ二里計向ふ朝鮮の大船四十艘餘飾
 てきて備へたる其より又一里計向ふ大船數艘重と
 もなく乗て浮めしは和軍小勢を以て軽く懸て
 やうハたつてけしとも諸將加藤は出抜したる口惜く
 思ひ我もくや船小取乗て押出さるかゝる處は加藤が
 船と目懸け前列の四十艘計の番船押来て箕手たり

加藤の船四艘と追取り巻く指詰引詰散り射れり嘉明
られと見敵船の間五六間を過し鉄炮を揃一心と志しめ
打つやしく下知しつれ鉄炮をばくまき打つる敵
船の士卒二十人計矢庭小打倒しけるあまに驚き騒ぐ処
一和軍水主揖取汗水をかろく第一乃番船に押著け奉り
鍵を打掛し引附け佃次郎兵衛土方長兵衛塙團右衛
門秋作右衛門等其外の勇士共競ひつろく敵船に飛乗
りしる此勢ひに畏れろく一人も見えざるけれバ何れ
も不審に思ひ踏板を引上げ見せハ皆船底に窟れ入て半
弓を引しが矢先を揃て待居りし土方長兵衛を始め

剛勇の革白刃と振て一度まどりと飛入る元來怯弱な
る朝鮮人ばいなる弓矢と捨手と合せ平伏し涙泣ける
と悉く切り捨て助け来りける番船一押著け飛乗る切
て廻りろく最初一艘切取られたる本巻に畏れ更し奉り向
ふ者なく匍匐をかろく刃を請け或ハ海へ飛込り空船に
あつたると十艘計乗取ると後れれどせの諸將の船共
加藤の軍士先きりけりて本柄を顯りたる成見て弥怒
り會釋もかく向ふれる胴勢の船を乗取らんと揉り
もんで押附る勢ひに怖れ敵將と見えろく樓船一番に北
け退くこれ小續いて総番船一同小逃げ走る味軍これに

氣と得て我一子乗を取らんと此處と追ふ事頻てかか
る處に敵船もくつふ太鼓打立総船一度に取つて取
一文字に列して各船より指括引括としく射る矢恰も
颯風は急雨の横切るが如く更には面も向け難く和軍是
射立らば和軍死人数を知らぬ中にも久留島出雲守討死
有らば是は辟易とて諸船進み得ざるを諸將自身
本と碎き士卒と恥ぢ先衆を勇めて鉄炮をつま喚き叫
むぐ攻たりけり此處の番船八楯を能く圍ひしを
此方の鉄炮に防ぎ彼方の火炮に防ぐ事能はば和船數十
艘打碎りし焚立らば諸船戦ひ屈して既退るとも

處小原坂安治大に怒り汝等朝鮮の地より一命を隕さ
と々善て覺悟せざれば討死して名と後代に殘せざる大
音聲よて士卒と勇め敵船の真中一乗入て火出る討つ
挑む戦ひ今や元來加藤の軍士等先と越さば其憤りよ
て假初に起るる船戦もて後度の本當なく口一と揉よ
ゆつたのめしそ而も敵ハ大勢味方ハ小勢なれば過半討死
し安治も死の覺悟と見らばハ郎從等抱き留めし
とも働のせむ此たびの合戦今日小限とてうらみ爰よ
討死を大死たるべしと大に凍め別船は無理無体子乗せ
移るや退りし何れも大に血戦して悉く討死し船ハ敵

よ果て取られり九鬼嘉隆藤堂高希士卒に向ひ斯く難
戦も成るゝ必死なれどハ引取らぬ物ぞ死存よくと
下知せしれ爰とせんぞと本と碎き力戦あり中も嘉隆
ハ船軍の功者として水主に向ひ敵船とば取むと働くべ
らバ敵船の真中と乗割て彼所此所一通る射るとも
ゆるむとぞ敵の船も當らぬやうに引取らぬと下知
して幾度も乗廻りして諸船も稍くと引取らぬ
の番船ハ材木とたて造りたるゆゑ双方行當りてハ和
船ハ損ト碎けり朝鮮の判事共今も語り傳へけり嘉
隆の下知と敵の船もありや朝鮮勢も終日の戦ひ
士卒つゝれぬるゆゑの和軍退くと追まなく其日の軍ハ

止らユ々も扱も服坂安治ハ今度の不覺一身の瑕瑾なり
と思ひ目附衆は達一切腹とくき昔望まれり是を聞て
藤堂高希九鬼嘉隆目附衆は對面有て今度の船軍中書一
人の不覺は非ハ曲厩の手勢は先と越され我一人とやを
て本船と押出し中書の船一番は敵船の中一カ内て入
りて敵を以て敵船追取り巻て難儀も及びたる也我等の
船ハ後れりゆゑ左程も及ぶに也然らば今度の中
書の瑕瑾と云くも處ハ我も遁れざる處なり此旨互
く言上は預るべしと有りハ目附衆も各の義氣と感
とられ軍の次第委細は名護屋に注進ししめ上ハ其

左右と待て其上への思案然るべしと有るハ各理の
脈命と待たる知小太閤より何下されたる安治の働
き實の勇士と謂つる我外國と征伐ハ加程に粉骨と碎
く働き幾度も無むばいづるの勝利を得むや汝等亦忠勤
を勵むべしとて其忠戦と感ぜしむば安治上意と承
る事事られし過つるは大に悦び勇まら高嘉隆
も安心有る名いふ忠戦と盡されし事

朝鮮 全羅道の水軍節度使李舜臣慶尙の右水使元均全羅
の右水使李億祺等と大に日本勢と巨濟の洋中を討破
ぬ初め敵軍既し陸に登るる元均敵の大勢なるを見

て敢て出撃し悉く其軍船百餘艘及び火炮軍兵と海中に
沈め獨舟下の裨將李英男李雲龍等四艘の船に乗る昆陽
海口に至り陸に上りて敵を避んと欲し是に於て舟下の
水軍萬餘人散るは成行なく李英男諫めて云く公ハ命を
受け水軍節度となり今其軍を棄て陸に上る後日罪を按
ずるにあらし時何と以て自ら解しや如く兵を全羅道に
請ひ敵と一戦し勝利たむと然後逃る事未晩の
ふよりと云え均は之と然るとして李英男とて李舜臣
の許へ坐て接いし清りむ李舜臣辭すも各名男有
りハ國王の命令非ざりて豈擅し自ら境を越ゆべしや

と云ふ元均又李英男とて往て清く凡注返らる夏
五六度及いぬ李英男の返る度毎元均船頭子坐きて
望し見て痛哭し既うして李舜臣板屋船四十艘と率ぬ立
よ水使李億祺と約し巨濟を到り元均と兵と合せ進むで
敵船と見方染と云處まで遇たり李舜臣云此地海狭く水
浅けしハ掛列子不自由なり如し佯て退き敵を誘ひ出
し海の潤き處小て相戦ふし元均ハ憤り乘り直
し前ひで搏ち戦ふしと云ふ李舜臣云く公ハ兵と知らば
うこれ如くし必敗らんとして遂に旗を以て船を揮き
て退き去りしハ敵兵大に喜び争ひてこれに乗て追ふ既

隘口と出づ李舜臣靛と打鳴しければ諸船一同に齊く掉
を回し海中に擺き列りしハ敵船と對頭し相距る夏數十
歩たり是より先き李舜臣割て亀船を造る板を以て上と
張る其形穹窿とて亀の如く軍士水夫も皆其内は在り左
右前後に火砲と多く載せ縦横出入自由なる夏核の如く
敵船に遇て連り大砲を以て打碎し諸船一時に攻立け
しハ烟焰天に漲り敵船を焚く事數と知らし敵將樓船の
高き處に櫓を施し紅段杉櫃を以て其外を飾りたる是
も亦大砲の為に打破られ敵軍悉く水に赴き死にたり其
後敵軍連り戦ひ破れしを遂に金山巨濟に逃入りて

出でるも少く此度の勝利開くは大喜び國王より李舜臣に一品の位を加へるといふはあまの恩賞を評議ありて正憲大夫正二位に陞り李億祺元均何れも嘉善大夫正二位に陞り少く是より李舜臣ハ三道慶尚全の大船軍を引率し閑山島に在陣敵軍の西小下る路とさへけり

筑紫上野の攻熊嶺之事

日本筑紫上野の廣門軍勢を率めて全州を乱入し熊嶺を攻寄たる所の處ハ重く柵を振らた少筑紫の若何程の事ありむと敵を見慢り攻支度とも用意せば只一擧

は操り落さむと攻登る城兵共寄手を目の利に見おろして指詰り詰散る射る筑紫の勢若干付れ進み得る寄手一と先山下に引退き一と息つきくる城中も追慕ふ程の勢いなりと見えそ城壁柵内を守りたる計りた少廣門後隊の急手勢を雜り更に進むと攻登る城中矢種盡る哉と見え射出し矢最初と違ひたりと云へ寄手氣を乗し曳くと聲を出し攻上る此城やそ攻落されぬづく見えたる處城兵も必死と思ひ極めたるや城門を剛き打て出寄手の勢と大に力戦しと云へども和軍の勇猛は比るべくも有されぬ城将も戦死し士卒も過半討れ

て大に潰れて城中一逃げ入たし寄手その時追らるる
攻入たば忽ち落城らるるに流紫勢も終日の戦ひ身疲
れ氣も屈せしは廣門も士卒と後へ引取らう明日上野
の廣門重て山下に押寄せたるが城のやうに前日と違ひ
いのさよもし後詰の荒草入来りて籠るる体も林木
の間は旌旗等見え夜ハ篝火と焼き連ねたれハ寄手も昨
日此戦いしと勢多し討り上たれば是等も見あどく
氣おろししとさきば敢て攻る夏も能く物見たり出
て窺らしめ數日守りつゝ居た所いづれも城
中多勢に成り而も荒草加へたりと見るとまは所詮

敵しつがごとしと思案となり終に陣を拂ひて引退く城
兵も敢て追慕はざりしに廣門も安くと引取らるる

朝鮮時敵の軍勢慶尚右道より全州の界に入りたるに

金提の郡守鄭湛海南の縣監邊應井等熊嶺にてこれを禦
く木柵を結びて横さるる山路と断ち切了將士と指圖し
終日大に戦ひ敵軍を射殺し事數を知らぬ敵既不退ん
ずや一日暮矢盡きしに敵勢いと得て更に進むる攻
たすくれば鄭湛邊應井俱に討死し士卒も散るる成行ぬ
明日敵全州に至るれば官吏走らむとけし全州の人
前の典籍李廷鸞と云者城に入り吏民を倡ひ呼ひて固く

守了けるの此時敵の精兵も昨日の熊嶺の戦ひも多く討
 死し氣力も已に盡きあつては監司李洸の計より又疑兵
 を城外に設け晝は多くの旗幟を立夜は炬火と列ねて山
 に満しむ敵も城下に到りしれども數篇環て視て敢て攻
 めよ去るなつ熊嶺にて戦死せし朝鮮勢の屍と悉く聚め
 て路邊に埋しあまゝ大なる塚を築きて木と其上に立て
 吊朝鮮國忠肝義膽と云文字を書附たり是蓋し其力戦と
 嘉し之也是は由て全羅の一道ハ全キ度を得たり

小西行長於平壤與朝鮮諸將迫合戦之事

日本 文禄元年 明の萬曆二十年 八月朔日 小西行長等、楯籠り

平壤城は朝鮮勢四千餘騎より押寄たり城中より軍
 勢と出して戦ふ朝鮮勢の内より精兵の射矢と探し
 て和軍を射させたるは行長の先鋒の士卒矢庭は十餘人
 矢小中を殪る是は怖れて進し得ば猶預してあつて小處
 城中より後軍の多勢馳せ來り一度は嚏と突懸る熊嶺
 無碍は切まらるるなつハ朝鮮勢若干討せ立るは順安
 きて引返るる味軍も長追せば人數をまゝに城中へ入
 りまらるる

朝鮮 八月初一日 巡察使李元翼 巡邊使李贊等兵を率ゐ進
 むる平壤を攻るる勝利なりして引退く時李元翼ハ

李賞と共ニ數十人の兵を率ひ順安に在陣一別將金應瑞等龍江三和靛山江西四邑の軍を率ひて二十余屯を依り平壤の西にあり金億秋ハ水軍を率ひ大同江の下流にあり以て持角の勢いとありぬ是の日元翼等平壤の城址より兵を進め敵の先鋒より行遇二十餘人の敵を射たりせしが既りて敵大勢馳來りてハ軍士共驚き散りて成り江邊勇力の士卒負討死多しをければ遂に引返して順安に屯せり

小西行長與沈惟敬會談之事

日本 九月朔の遊撃將軍沈惟敬と云者順安に到りて書と

小西行長に馳せて問ふ朝鮮何の虧負らるる有て日本何ぞ擅に師旅を興ひ哉と行長其書を見て即ち回報し面を見らる事と議せし事と述べおれしに因て日と約し沈惟敬出來りし故行長義智禰長老等と伴ひ出て城址十里の外の外に會ひ推敬に告るふ太閤朝鮮を征らるの故と以り推敬乃ち行長と和好と議し因て約らるるに吾歸る明朝に報し取計ふ道有て五十日と限期を以て其間日本人平壤西北十里の外に出で擄掠らるる勿れ又朝鮮人も十里以内に入りて日本人と争ふ勿れと乃ち地界を木と立て禁標とせり立別れ去りし少行長城に歸り兵

と歛めて働かば既よりて五十日過るれども惟致到らば
是よおんて行長義智大に攻城の具と修ひ軍兵と發して
直ちに進む事と欲しけり

朝鮮九月明朝の遊撃將軍沈惟敬朝鮮に來る是よりて
祖承訓既よ敗軍敵愈驕つたつて書と朝鮮に送る中
は群羊放一席の治りて是ハ群羊と明兵は喻一席と以て
自らふたと金袴つてくる詞を朝夕西に改下らむといふ
由と聲言けしハ義州の人皆家財を荷たつて立居たる計
あり沈惟敬ハ本浙江の民たるを兵部尚書石星以為日本
乃情と諳むしつて遊撃將軍の号と假して遣りけり

るわう沈惟敬既よ順安に至る時よ日本の變災猝に發り
且人々殘ひ苦乏しむる夏其志々れむ人々憐れ思ひて敢て
日本の軍營を窺ふ者あり沈惟敬黄いろの袱し書翰と畏
み家丁一人よ背負つて馬に騎り直ちよ順安の普通門よ
り入る書翰と日本の將を送る行長其書と見即回報一面
談さる夏と議せむと云送るれハ沈惟敬將は生むる人
人皆これと危ぶみ止むる者多し沈惟敬笑て云彼等我
と害せしやとく三四人の家丁と後へてこれよ赴く行長
義智玄蘇等盛に兵威と陳ね出て城址十里の外降福山の
下よ會ひ朝鮮の軍兵共を大興山の上よ登り望み見れり

日本の軍勢夥多、劔戟雪の如く光り、やき立る、
る、沈惟敬馬よをひき、日本の陣中に入る、日本人群集志
て四面を水圍く、ゆゑ拘執らる、やと疑ふ、日暮、
沈惟敬還る、来りぬ、沈惟敬日本人と約し、我朋を還る、報
かな、當より記取計ひある、一日數五十日、以て期とせ
む、日本勢平壤の西十里外に出で、犯し掠む、夏無く、
朝鮮人も十里内に入りて、日本人と闘ふ、と云ひ、堅め、乃
ち累目、木を立て、禁標として去りぬ、い、の、事、後、
た、朝鮮人測る者、る、け、
征韓記曰、沈惟敬者、亡命無頼之人也、嘗潛来于日本、被知

於行長、歸國之後、通于吳妓陳澹如、澹如僕有、鄭四者、數年
以前、赴日本、而被執、是年、逃歸、途、惟敬、而詳語、日本之事、惟
敬為人、頗有所志、聞鄭四言、謂方今、大明動干戈、以防日本、
當此、兵乱、吾將、樹勳功、矣、即赴京師、揚言曰、我能知、日本之
事、時、司馬石星、掌朝鮮之事、其妾文表、茂偶、遊澹如之宅、聞
惟敬之言、而薦之、於石星、石星召、惟敬、而詰、大喜曰、吾得、人
也、祖承訓、敗軍之後、石星、謂不起、大軍、則與日本相戰、尤難
乎、因之、先遣、惟敬、說和好之議、而後、欲聚、大兵、惟敬、請金錢
貸、于石星、曰、以此、賄、于日本、諸將、而結、和親、議、石星、聽之、於
是、惟敬、散、千金、買、蟒衣、玉帶、花幣、而入、朝鮮、先遣、人、于平壤、

挑行長之意行長素喜和議與惟敬會于乾伏山麓惟敬極陳和好之為善行長標題七箇條曰若悉可之則吾從和親之謀矣惟敬先皆同之是故行長及諸將皆信惟敬之言待其報至而欲撤平壤之戍增田長盛石田三成大谷吉隆之旨如此故不攻朝鮮諸城唯贖為消日也行長贈書於惟敬其趣曰日本絕勘合船既久矣是以秀吉數年雖求和親于朝鮮而朝鮮不應日本之望故秀吉勃然進節旌鷄林也今足下來于平壤以欲結奏和交是國家秉平之基乎足下奏明帝遣官使于日本為交親之左券則何幸加之為官使若來則以五十日為期矣惟敬歸大明雖報之不徑臣之衆

議則其事未決

宇喜多秀家攻落胡寧之事

日本宇喜多秀家ハ京城の守にたつてゐるが京畿道の新監司京城と取返さしむと計畧と廻り或ハ捕とさる又ハ倭軍に降つて城中にゐる者共と言ひさつ返した忠とさる一めんといふ人と城中に入つて理と説せしは是の一味とさる者數百人よ及び或ハ倭軍の謀と知らしむると云ひ又ハ城中のやうにと通じるとして往來とる者多しこの事からいかなつて即ち秀家も謀と出来たに申降卒捕の中にて剛愎不頼の者よ利と暗とめ味方の犬と

朝鮮征伐治策記 卷之四

やして敵の動静を聞らる。或夜潜り監司の居所に朔寧郡に押寄て俄に門を破り鉄鉈を發ら喚き叫んで攻入り了。恐ひの者火を掛け焚立々れば朔寧郡の軍兵ども上り下り騒動する處に備前の兵士共各片手打し難迴らん。ゆゑ討り者數を知らず寄手より和を乞ふて追討する一人も残らぬ討取らる。つぎに朔寧を攻落しゆる上り最早長追らるるべしとて速に諸務を打納り了然る處に乱軍の中は監司討りし子由聞らる。うば秀家士卒より下知して監司の首と大路に集り威を示しける。

朝鮮 是年の秋權微に代りて沈岱京畿監司とかり義州に

又住所に赴きける京畿道の難儀ハ他道より少しも甚く敵軍日く城外に出て所々を焚掠め静かす所とてハ無く前後の監司及び守令以下悉く人知らぬ片遠所に身と忍び行列とも立てぬ微服を潜り往還し或ハ屢斂居と定めぬ。以て敵の患を防ぎぬ沈岱ハ敵を畏れざる。通行せし京畿道の軍兵と聚りて悉く我身は随一聲言々る。京城を恢復せしと欲ふとて日よ人と城中に入らて招き集め約束を設け内應となさむ。城中の人事定まり後ち敵は組せしもの罪を獲む。度々恐りて連名書附

朝鮮征伐治策記 卷之四

と以て監司の方一赴き内應せんと云出る者日千百と
 以て數ふ管をれく一人名目と附て曰く約束と聴く曰
 く軍兵と出さむと曰く敵情と報らるなんどして人々往
 來阻て無さく中わらふ敵の耳目となつて來て朝鮮の
 動静とすつて一者も多し相ひ離て出入さるれも沈岱大
 使信ぞて疑ふべこの比沈岱朝鮮郡に在るるの敵是
 と伺ひ知て潜り大灘と渡り暗夜に來り襲ひ攻むれば沈
 岱驚きあつた衣服と肩に掛て走り出る敵追ふけりて害
 此時軍官張姓なる者も同く死に敵退つて後、京畿の
 人權は朝鮮郡中、殞れ數日とたつて、敵復さ出て其

首と取り鐘樓の街に上懸けし、京城の人其忠義と哀
 相ひ與り財物と率ひ來り守り居たる日本人、賂と以
 て贖ふて其首と出し、函に納りて江華に送りぬ敵退て後、
 骸と一處りて故郷に還り葬ふと云々

忠州原州春川等在陣諸將與朝鮮軍追合戦之事

日本日本の軍勢慶尚道より忠清道江原道と徑て追く京
 畿に攻入るる時忠州道内原州道内金山より京城一
 の要路をば奉行の内忠州は増田右衛門尉長盛原州
 小石田治部少輔三成在陣し京畿の驪州一通して京城
 一往來絶る事なりけり然る小江原道の守將軍勢を催

一驪州の亀尾浦より増田の勢と追合し及びくは朝鮮
勝利を得たり石田三成原州の陣より京城に赴きくは
朝鮮勢精兵の射撃とくく立て驪州の馬灘より各船に
取乘り矢継ぎや散り射立れば石田軍勢矢庭に數
十人射止され大に潰れ敗軍に及びくは茲に毛利壹岐守
ハ春川の陣と取り居たりくは小朝鮮勢と合せ押寄る
と聞えりゆは毛利の士卒は向ひ爰よりハ一武畧と運ら
りどりとく我陣營より十町計に前面に能き奸場ハ森木
有ける小勢と分け伏兵と設けたる案の如く朝鮮勢押來
り彼の森と左に見て馳せ通じ毛利勢と挑み戦ひくは斯

て軍半たるは伏兵一度に起し立陣と造り朝鮮勢の後よ
り打て掛り前後より取圍み一人も餘さりと攻戦ふ朝鮮
勢前後に敵とけ途と失ひ一度に墮と崩れ立只とく
と叫び合ひ算と乱し四方に逃げ奔る日本勢ハ敵の立つ
所もなく敗走する小乗るに備と乱しまはる掛け追
打ち數百人討取りけり毛利の勢一戦に勝利を得思ひのま
ま郡縣に火と放乱妨り威と示しけり
朝鮮江原道の助防將元豪ハ敵軍と亀尾浦より撃ちくは
と穢りくは此時敵の大陣忠州及び原州に在り營と
連ねて京都に續きたり其忠州に在る者ハ路と竹山陽智

龍仁は取つて往來し其原州に在る者ハ砥平楊根楊州廣
州よりして京に抵る元豪敵と驪州の龜尾浦より鐵嶺
利川の府使邊應皇ハ船に射半と載せ霧は来たり敵と驪
州の馬灘に邀て敵と殺す事頗る多し是より由て原州の敵
ハ往來の路と遂に断ち悉く忠州の路よりこの往來せし
利川驪州楊根砥平等の邑民共敵に鋒先きを討洩すハ
は元豪の功なりと皆人心を思ひけり巡察使柳永吉又元豪
と催促して春川の敵と討ちめし元豪既に龜尾より勝
ちしるゆえ頗る敵と輕むざるの意あり敵ハ元豪の將に
至らし事を知り伏兵と設け待居たるを元豪知りて兵

と進むるは伏兵發して遂に多しを殺せしは於て
江の一道は敵と禦る者たらずなり

福島勢在番永川慶州洛城之事

日本去る四月以來切取たる慶の諸道の郡邑は軍兵と
分け各番を持して守りたる慶州ハ福島左衛門大夫正則
の本勢番を持して永川慶州の内も福島勢守り居たり朝鮮勢
拂曉に押寄せ攻戦ふ不意を討れ日本軍團に負け敗北
に及びしゆえ永川を朝鮮勢取復せぬ茲に又慶尚道の部
將も兵を引具て慶州の城に攻寄せし此城は福島正
則の家臣多川内記番を以て守り居たるの士卒と

所より鉄炮と巖をく發ちうけ時と見合せ討て出敵と追
ひ退けくふ或夜敵よりこも夥き大砲と城中一發ち
懸け丸乃庭小落り番手の者思ひも寄らぬ所るに聞
きたる事も無き響きまきまき小百千の雷一度は鳥落るの
如くありて飛丸數千發し出てあはし中して即死する者
二三十人又中らざる者數十人こげ仆れ絶え入り事さづ
かして後藥と與一水と吞ちめて漸く人心地出来たり
倭軍大は驚き怖し何れも舌と巻き翌日内記士卒を後一
城と棄て西生浦一列取たり

朝鮮

訓練副奉事

軍士の才と試し藝と練る後 兵書と習や否と試る後

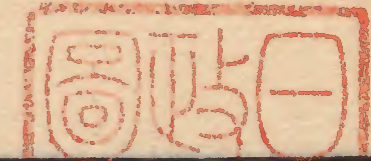
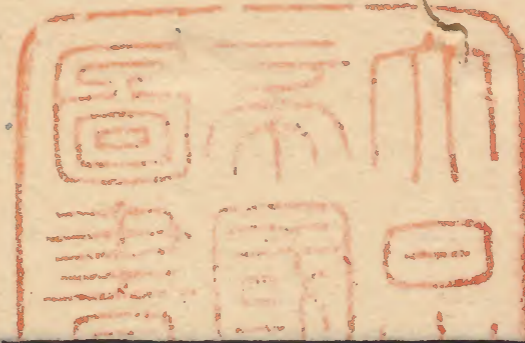
權應銖鄭木任

等千餘人の郷兵を以て永川の敵と圍くは軍士敵と畏
れて進まざるゆるゆえ權應銖數人と斬りけし巴士卒我
先少と奮い進み城と踏きて打入り敵と城内の路を戦
ひの敵勝利なく奔りて倉中に入り或ハ明遠樓の上る
もつらと朝鮮の軍勢火と掛けたるハ悉く焼死志
る臭き事數里に及ぶるを討洩されし敵數十遁
りて慶州に歸りしは是より新寧義興義城安東等居け
る敵も皆一路に集りしゆえ左道の郡邑保つ事と得たり
は全く永川の一戦に功なり

左兵使朴晉ハ初め密陽より奔り山中に入りしは前兵使

李珣の城と棄て逃げ奔ると以て其居る處より誅せし
其代りとして朴晋と兵使と人時は敵兵行在辺に充満
て南小通せざる事久しうバ人心揺動如何にもなる
所を知らざるは朴晋兵使になつたると聞及びて散
民ども稍集まり守令も改く山谷の中より出て其處の事
は益々始て人々朝廷有る事を知りぬ權應銖が永川の城
を復らざるに至りて朴晋も左道の兵一萬餘を率の進むて慶
州の城下を攻寄せしバ敵ハ潜り北門より出で後ろの
陣に廻り不意と襲ひしゆゆ之朴晋奔りて安康に還り其
夜又人を遣りて慶州の城下を潜り伏せ置き震天雷を

發しやせしれを城中に入る客舎の庭中に墮つ日本勢其
製法を曉らば争ひ聚りてこれを觀相與に推轉して諦し
視たりしは仕込し置たる丸の中より發しおろし其聲天
地を震ひ鉄片星の如くは砕け出て中より即座に斃る
者三十餘人未だ中らざる者も六顛仆し良久して起上
り驚き懼れざる者莫らざる其法製を測り得ざるゆへ皆
く以為神也と云ふれし因りて明日遂に殘らば城と棄て
西生浦に遁れ歸りぬ朴晋遂に慶州に入りて殘るる米穀
萬餘石を得たり此事國王に聞え朴晋ハ嘉善從二に陞り
應銖も通政品三に陞り大任ハ醴泉の郡守なり抑此の震



朝鮮征討始末記卷之四終

夫雷（雷）云（云）八古一其製無（其）軍兵寺の火炮（火炮）西李長孫と云（云）者創（創）めて作（作）り出（出）せし震（震）未雷（未雷）と取（取）てこれと放（放）せハ飛（飛）ふ事五六百歩（五六百歩）に到（到）りて地（地）に墜（墜）ちて良久（良久）とて火鉄丸（火鉄丸）の中（中）より發（發）する仕掛（仕掛）にて敵軍（敵軍）最も此物（此物）を畏（畏）れりとなら

朝鮮征討始末記卷之四終

對州 山崎尚長輯 村倉治郎藏板

嘉永七甲寅初冬刻成

京都

三條通升屋町

出雲寺文治郎

心齋橋通博勞町

河内屋茂兵衛

心齋橋通安堂寺町

秋田屋太右衛門

江戸

本町三丁目

和泉屋善兵衛行發

